

里山里海に関する人々の認識

朝日新聞主催「にほんの里 100 選」応募事例から

岩田 悠希

キーワード： 里山里海、景観生態学、一般認識、景観類型化、
地理情報システム、多変量解析、テキストマイニング

1. 背景と目的

持続可能な社会の構築が必要とされている現在、過疎化、高齢化、都市化などにより衰退が進んでいる日本の農村漁村が見直されはじめている。それらは近年「里山里海」とよばれ、持続的資源利用に加え、生物多様性保全の観点からも、将来の資源確保の観点からも、その価値の評価(里山里海 SGA：国連高等研究所など)が試みられている。このような状況の中、朝日新聞社が 130 周年を記念し「にほんの里 100 選」として「景観」「生物多様性」「人の営み」の観点から特に優れた里を 100 ヶ所選定する事業を行った。本研究では一般公募より集まった 4000 近くのデータに焦点を当て、応募地の地理的分布と応募文の頻出キーワードを分析することで、「人々の里山里海に関する認識」を明らかにし、今後の「里山里海」研究への新たな情報提供を試みた。

2. 方法

応募データから分析に利用できる 3024 のデータに緯度経度情報を与え、国土数値情報から提供されている地理情報と重ね合わせ、地理情報システムによる景観分析 (ArcGIS 9.2) と主成分分析 (SPSS 16.0 Japanese) を使い応募地の景観類型化を行った。これにより応募地の景観的・地理的傾向を明らかにし、地方別、応募者タイプ別の応募地の違いを比較した。次に応募文にテキストマイニング (SPSS Text Analysis for Surveys 3.0 Japanese) を適用し、里のアピールに使われた頻出キーワードを抽出し、地方別、応募者タイプ別、里タイプ別による傾向を分析し、一般の人々にとっての里山里海の重要要素を考察した。

3. 結果と考察

景観類型分析の結果、応募地は森林型、森林田畑型、水田型、畑地型、都市近郊型、海辺型の 6 つのタイプに分けられた (図 - 1)。集計の結果、60 パーセント以上の応募地が森林型 (森林面積 90 パーセント以上) であり、北海道を除いた日本全国に散らばっていることが分かった。特に甲信越地方の森林型へは、他の県からの応募が多く、日本の里のイメージが甲信越地方の山間部に多く見られることが分かった。また都市近郊型への応募

は関東地方の地元または NPO 団体からの応募が多く、都市部の人々の里のイメージが都市近郊で活動が行える緑地にある傾向があることが分かった。また、海辺の里へは、漁業・離島・海洋関係の団体からの応募が多く、一般の人々からの応募が極端に少ないことが明らかになった。このことから、「里海」という概念が一般の人々にはまだあまり広まっていないことが提示された。またキーワード分析の結果からは、「景観・風景」「自然」「活動」「美しい」などが多く見られたが、「生物多様性」に関するキーワードは全応募文の 2 パーセントにしか満たず、しかも行政や NPO 関係からの応募に限られていることが明らかになった。このことから、一般の人々の里山里海の認識の中には、「生物多様性」という概念が含まれにくいことが推測された。そこで、今後の里山・里海研究へは、「生物多様性」概念の普及に加え、いかにして「景観の美しさ」や「活動の行き安さ」を一般にアピールしながら、意義のある里山・里海保全へつなげるかを検討する必要があることが提案された。

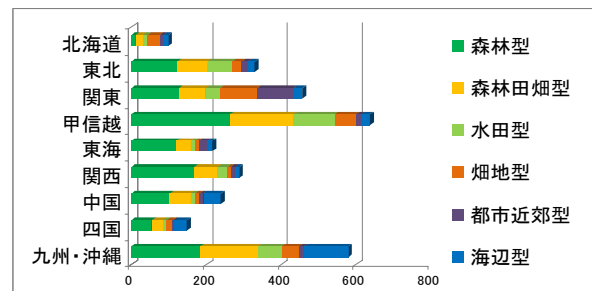


図-1 都道府県別応募地里タイプの分布